

荒縄SM文庫

# M穴地獄

―デッドライン―

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

TOP SECRET

sanple



**TOP SECRET**

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆し、匿名活動をスタート。

その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「へふにゃ」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

**TOP SECRET**

# 目次

注 6

T +7 残された音声 8

T -6 手記 発端 2 6

T +6 手記 2 拷問部屋 4 7

T -5 手記 3 穴奴隷 6 9

T +5 手記 4 乳房拷問 1 0 2

T -4 手記 5 女主人 1 3 8

T +4 手記 6 排泄穴潰し 1 6 8

T -3 手記 7 汚される体 1 8 9

**TOP SECRET**

奥付	T -0	T +1	T -1	T +2	T -2	T +3
3 6 1	デ ッ ド ラ イ ン	手 記 12	手 記 11	手 記 10	手 記 9	手 記 8
		炎	拵 張 と 獣	鞭 と 針	肛 虐 ざ ん ま い	性 器 拷 問
	3 4 8	3 2 9	3 1 0	2 9 1	2 5 0	2 2 2

**TOP SECRET**

## 注

この作品はラストからはじまり、主人公がデッドラインを越えた場面へ遡っている。

各章につけられた記号は、T-7の時のこと。T-0がデッドラインであり、それ以前をTマイナスであらわし、それ以後をTプラスであらわした。

過去から現在へという流れで見れば、T-6、T-5、T-4、T-3、T-2、T-1、T-0とデッドラインに向かい、そこを越えてT+1、T+2、T+3、T+4、T+5、T+6、T+7となる。

**TOP SECRET**

ただし、これは残された手記が、混乱のままに記載されていたことから、できるだけ忠実に手記を再現したために生じたものである。いつの時点で書き記しているのかが不明であったり、あとから書き足している記述も多く、正確に時系列に並べることが難しいと判断した。

なお、明らかに話が前後して読者の混乱をさらに招く部分は修正している。

## T+7 残された音声

手書きの手記と音声データが、左六のところへ送られてきた。レターパックだったが、電話番号はでたらめだった。この作品はその手記とデータを元になっている。読めない部分や聞き取れない部分を推定し、つながりの悪い文章を補うなど、手を加えていることをお断りしておく。

私は名前も捨てました。

**TOP SECRET**



ついこの間まで〇市で平凡に暮らす女子校生にすぎませんでした。なにもかも捨てようと決めたのです。衝動に突き動かされてやったことですが、後悔はありません。

たぶんありません。あつたとしても、ここまで来たらもう遅いし。

なにもかも今日で終わりですから。

かなり時間をかけて穴を掘られました。連れて来られた時は日が高かったのに、山々に囲まれているので薄暗くなるのも早くて。

私は全裸です。身体中、傷だらけ。体力もなくなつてきています。血も流れています。傷の手当てはもう、していません。

泥だらけになっています。底に立つと肩まで沈む深さに、やっと達しました。そこで、作業をやめろと言われました。

「生まれてはじめてまともな仕事をしたな」と男が笑いました。

スコップを穴の外に放り投げました。終わったのに、彼は穴から引き上げてはくれません。

「いい穴じゃないか」

代わりに足枷を渡されました。この穴でそれをつけること。

終わりにふさわしい支度。

ゾクゾクしてしまいます。とんでもなく酷い目に遭おうとしています。自ら墓穴を掘ったのですから。

ハーハーと呼吸だけが狭い穴に響きます。

ガチャリと音を立てて足枷と足枷をつなぐ鎖に南京錠をかけました。

「これもやろう」

ありがたいことに極太バイブをくれました。痛みをこらえて傷ついた自分の穴に押し込んでいきます。

「ぐはあああああ」

情けない悲鳴。声はしわがれてしまっています。とても女子校生の声ではないでしょう。

バイブを押し込んだ穴は、裂けているのかもしれない。それとも、いま裂けたのかもしれない。激痛にクラクラしています。

「これも欲しいか？」

「ください」

グズグズに裂けたアナルにも金属の棒を入れました。すべすべした表面ですが、表にいくつもの小さな穴があいています。その仕掛けは昨日、彼に見せて貰っています。

ツバをつけて奥深くまで入れていきます。それから底の部分にあるスイッチを爪でひっかくように引き出しました。そして反対側へ倒していったのです。

「うぎいいいー」

棒の中に仕込まれた何十もの針が腸や粘膜に突き刺さっていきます。

「はひ、はひ、はひい」

もう体力の限界が近いのです。急がないと……。

棒とバイブからコードが延び、防水容器に入った大型バッテリーに繋がれました。そこにはソーラーパネルが接続されています。壊れない限り、永遠に電力を作り、蓄積し器具に送り続けるのです。

男がくれた鎖を膝から上に巻きつけて南京錠をかけました。

「ふー、ふー」

男は上から長く太い鉄筋を差し込んできました。膝

の鎖と足首の鎖を突き通って、斜めに地面に深く突き刺さっていきました。反対側からも一本差し込みました。さらにもう一本。

ハンマーで三本の鉄筋を深く打ち込まれました。カンカンと無情な音が木々に反射しています。

私の身長より長い鉄筋が、胸元あたりまで打ち込まれました。下半身は身動きができなくなりました。

どんなことがあっても、まずこの鉄棒を引き抜かない限り、ここから抜け出すことはできません。

左手に鎖のついた枷をし、そこにも南京錠をつけま

す。股間にその鎖を通し二つの器具が深く入ったままになるよう、思いきり引き上げました。

「がはっ」

股間が裂けて、生温かいものが腿を伝っていきます。生きながら裂いていくのです。それも自分の手で。

まだ生きています。哀しいことに。

右手の枷に鎖をつけると、男がそこに南京錠を取り付けてくれました。

「本当にこれでいいんだな」

「はい」



穴の底にカギ束を落としました。私がそれを自分で拾うことは不可能ですし、誰かが私を発見しても、その鍵束には気づかないかもしれません。

男は穴に土を戻していきます。湿った土は最初は足を埋めていきます。腰のあたりまで達すると、徐々にその重みが体を締め付けきました。

「こんな死に方、よく考えたな」

「夢がかなってうれしい」

「ドキドキしてるのか？」

「はい」

男は力強くスコップで土を押し固めながら、首まで埋めました。胸が圧迫されて呼吸が苦しくなります。すでに傷だけになっている胸は土に擦れて痛がゆいのです。

完全に埋めました。

かろうじて顎から上だけを残しています。上を向いたかっこう。耳が地面に触れています。

入念に軍隊のようなブーツで地面を踏み固めていきます。ぎちつとした重みに体がさらに締め付けられます。

男は数枚、写真を撮った。

「むううううう」

スイッチが入りました。前のバイブが振動していません。強くなったり弱くなったり、ランダムに変化します。

傷ついた膣。だけどなんだか感じている自分。

「ぎゃひっ。お尻が焼けるう」

肛門に深く突き刺さった金属棒は、ランダムにスパークするのです。その強さもタイミングも予測できません。蓄電池に溜まったら、いつきに放電されます。

「あひっ」

しばらく苦悶の声を上げ続けました。体力はもうわずかなのに、まだ快樂が欲しい……。どうしようもない私。

「なにしてるんだ」

「指で傷口をいじってます」

「あそこか」

「はい。ちぎれてしまったクリトリスの傷口に指を入れて、土をじやりじやりと擦り付けています。ほかの傷口も土に擦り付けてるので、すつごく痛いいいい」

数回、絶叫しました。

「ここは誰も来ない。しかし万が一、助けってくれる人が現れるかもしれないな」

「一晩も耐えられないと思います」

「それでいいのか？」

「はい」

しばらく悲鳴と甘い声をあげていました。それはロボロになってから獲得した新しいオーガスム。激痛を脳が勘違いして甘美な快樂として受け止めてしまうのです。

痛ければ痛いほど気持ちがいい。

「もう暗くなつてしまった。帰るからな」

「お願いです、最後にお慈悲を」

頼み込む哀れな娘に、男は小便をかけてくれました。

「末期の水だ」

「はああ、ありがとう、ございます。本当に、ありがとう  
ございます」

ありがたく、飲み干しました。

ワンワンと野太い声がしました。

男が連れている二頭のペットも、主人に習つて小便

をかけてくれました。さらに顔の上に脱糞し、後足で土をかけたてきました。

「ふぐぐううううう」

苦悶のうめき声しか出ません。なんという苦痛。なんという屈辱。惨めさ。この中で消えていくのです。願った通りに。

こうして名もない私はなんども絶頂を感じながら静かにこの世から去ります。無惨で甘い快樂に包まれて。さようなら。

「ひぎっ、いたっ、裂けるう」

——彼女の甘い悲鳴がしだいに遠くなっていた。録音機が遠ざかっている。山の静けさが大きくなり、男が枯れ葉を踏むザクザクという音と狩猟用に鍛えられたペットの荒い呼吸の間に、かすかに彼女の悲鳴や鳴咽がしていた。

ふと、足が止まる。

男は耳を澄ませている。あたりはすっかり暗くなっているのだらう。埋められた娘はもう見えない。

「ぎい　い　い　い　い」



山に奇妙な声が反射する。それは彼女の悲鳴なのか、  
鳥の鳴き声なのか。

録音はそこで終わっていた。

念願の一人暮らしをはじめて半年。勉強して寝る。勉強してバイトして寝る。バイトして寝る。勉強して寝る。その繰り返し。

友だちはいません。お茶や食事ぐらいの仲間はいても、私に興味を持ってくれる人はいません。私からは近寄りません。カラオケにもいかないし、サッカーも見ません。マンガも読みません。

こんな風になったのは「自分というモノしかないの

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一四年九月刊行 第一版

著作権 あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

● ブログ「荒縄工房」

● ホームページ

● 荒縄工房 S M 研究室

● 今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。